

生徒の安全な通学のための教育教材 DVD

安全な通学を考える
～加害者にもならない～

[ワークシート]

指導のポイント

文部科学省

C O N T E N T S

本教材のねらい ……………3

まずは、自分のこと、地域のことを考えてみよう

そう言えばある！「ヒヤリ」「ハッ」とした経験 [ワークシート p. 1] ……………4

自分の乗り方は安全か？

- ①見通しの悪い交差点 [ワークシート p. 2] ……………5
- ②一時停止の標識のある交差点 [ワークシート p. 3] ……………7
- ③歩道での走行 [ワークシート p. 4] ……………8
- ④信号のある交差点の横断 [ワークシート p. 5] ……………10
- ⑤朝の校門付近 [ワークシート p. 6] ……………11
- ⑥夕暮れの帰り道 [ワークシート p. 7] ……………13

危険を予測する力をつける！ [ワークシート p. 8] ……………15

気持ちを意識してみよう！

- ①ストレス診断テスト [ワークシート p. 13] ……………21
- ②「ふだんの自分」の心理テスト [ワークシート p. 14] ……………23
- ③「焦り」をコントロールする [ワークシート p. 15] ……………27

地域の安全を守る役

- ①子どもは見ている [ワークシート p. 16] ……………28
- ②見えているもの、見えている世界が違う [ワークシート p. 17] ……………29
- ③他人の安全を守る [ワークシート p. 18] ……………30

事件に巻き込まれないために

- ①通学時の安全について考える [ワークシート p. 19] ……………31
- ②夕方・夜間の防犯を考える [ワークシート p. 20] ……………32

事故を防ぐにはメンテナンスも必要

- ①点検・整備には自分が責任を持つ [ワークシート p. 21] ……………33
- ②自転車の点検・整備に関するマーク・制度 [ワークシート p. 22] ……………33

道路標識と法律

- ①わかる？ 道路標識・補助標識の意味 [ワークシート p. 23] ……………34
- ②道路交通法を見てみよう [ワークシート p. 24] ……………34

〈付録〉 交通安全ひとこと日記 [ワークシート p. 25] ……………35

本教材の ねらい

通学時などでの交通安全等について、生徒には自ら安全な行動をとれるようになってほしい。安全な行動を実行するためには、四つの力を育成する必要がある。①交通行動の基本、②交通状況への適応力、③行動計画の力、④社会生活の力である。これらの力はどれか一つが不足しても、十分に安全な行動はできない。四つの力をバランスよく身につけることが重要となる。この教材では、四つの力に対応する課題に取り組むことで、生徒の安全行動の形成を促すことを目指している。

自分の 乗り方は 安全か？

交通行動の基本を身につけることがねらいだが、生徒はすでに基本的なことは知っている。そこで他人の交通行動を見て評価することで自己理解を促しながら、自分たちの自転車の乗り方を再考し、基本を再学習することを目的とする。▶▶ ワークシート p. 2

危険を 予測する力を つける！

交通状況への適応として、最も重要な危険予測のスキルを向上させることを目的とする。ある状況に置かれた時に、危険につながる可能性のあるポイントがどこにあるかをすばやく探し、どうしたら危険を回避できるかを考えながら、危険予測の必要性を認識し、その基本を学習させる。▶▶ ワークシート p. 8

気持ちを 意識して みよう！

焦り、イライラ、怒り等のネガティブ感情は、生徒の交通行動を危険なものにする。児童生徒に対する現行の交通安全教育は、交通行動の基本、交通規則の知識、危険予測の学習が中心であるが、感情のコントロールを学習課題とする安全教育は、自分の内面にあるリスクを見つめる新たな視点を提示する。そこでここでは、生徒自身が日頃どんなストレスを感じ、どのように対処しているか、またふだんの自分の感じ方や性格に着目し、それがどのような交通行動につながっているか、どのような危険につながり得るかを考えさせることを目的とする。▶▶ ワークシート p. 13

地域の安全を 守る役

中高生は「守られる」立場から「他人を守る」立場への移行期間にあると言ってよい。ここでは、自分のまわりの社会へと視野を広げることを目的とし、小さな子どもたちが交通安全を学んでいく過程にすでに関わっていること、社会には様々な年齢や背景を持つ人々が共存していて、互いに配慮することで交通の安全がつけられることを考えさせる。▶▶ ワークシート p. 16

事件に 巻き込まれない ために

交通安全以外の危険／安全について、防犯の問題を取り上げる。危険予測の手法を使って、防犯の観点から通学時の安全を考えさせる。▶▶ ワークシート p. 19

事故を防ぐには メンテナンスも 必要

自転車の安全な利用においては整備も重要なポイントであることを確認し、自転車の基本的なメンテナンスについて学習させる。▶▶ ワークシート p. 21

道路標識と 法律

クイズ形式で標識を「読む」ことを通して道路標識の基本的な知識を確認し、道路では常に標識に注意を払うことを促す。また、自転車利用に関係する法律に触れることで、自動車・二輪車と同じように道路交通法その他の法律に則って走行する必要があることを意識させる。▶▶ ワークシート p. 23

〈ねらい〉

導入として、まずは自分のこと、自分の日常での交通安全について意識させる。これにより、学習内容について、授業の中だけのものではなく、自分との関わりを意識するよう導きながら、生活の場で学習内容を定着させることをねらいとする。

1. 自転車で走行中、自動車や歩行者と事故になりかけて、「危なかった！」と思ったことはあるだろうか？

〈ポイント〉 たいていの生徒が、「危なかった！」とヒヤリとした経験を持つ。しかし、その時にホッとするだけで終わってしまい、なかなかその後に活かされない。ここではもう一度その経験を思い出し、以下の学習で今後の交通安全に活かすことを考えさせたい。

2. 場所、自分と相手の動きなど、状況を思い出して書いてみよう。

〈ポイント〉 いわゆる「ヒヤリハット」の経験（ヒヤリとしたりハッとしたりした経験）について状況を思い出させ、自己分析の手がかりとなるよう導く。図を描かせてみるのも有効である。

3. その原因は何だっただろう？ あてはまるものをチェックしてみよう。

〈ポイント〉 自分の失敗について掘り下げて考えさせることがねらいである。一方、以下のような質問・指導は有効と思われる。

「危なかったと思った時、なぜそうなったか、考えた人はいる？」（手を挙げさせる）

「また同じことが起こった時には大きな事故につながることもあるね。危なかった時は、その原因を考えて、同じことが起こらないようにするのが大事だね」

4. 家の近所や通学路で「ここは危ないな」と思う場所をあげてみよう。

みんなで意見を出し合って、クラスで「学校周辺の危険ポイント ワースト3」を作ってみよう。

〈ポイント〉 意見の出た各箇所について「ここが危ないと思っていた人は？」と手を挙げさせ、人数の多い順に「学校周辺の危険ポイント ワースト3」を作成する。グループワークを通して、地図上に印をつけて安全マップを作るなども有意義であろう。学校やPTA から与えられる「安全マップ」でなく、自分たちの手でリストもしくは安全マップを作ることで、自分の問題としてとらえられるようになることをねらう。

〈ねらい〉

【自分の乗り方は安全か？】では、様々な実景をDVDで見て、安全確認や一時停止の仕方など、「安全な自転車利用」「安全でない自転車利用」を観察し、自分の乗り方に照らして考える。

映像を見る前には、提示した場面での危険は何か、どんな事故が予想されるか、どうすれば事故を防げるかなど、行動の理想となる基準を明確にイメージさせたい。この基準(理想)を念頭に置きながら映像を見ることで、基準とずれていることがわかるだけでなく、「はたして自分はどのようなだろう？」という意識を導くことができる。

映像を見たあとには、○×や択一問題でなく、「どんなことに気づいたか?」「どう思ったか?」などとオープンクエスチョンで問いかけて、個々の気づきを引き出す。教師の側からは先に答えを言わないようにする。「安全を確認する」「ゆっくり走るとよい」などの抽象的な回答があった場合には、「安全を確認するって、具体的には何を確認するの?」「ゆっくり走るといのはどれくらい?」など、できるだけ具体化できるよう導く。さらに、映像は他人のケースであるため、自分とは関係ないととらえられることのないよう、必ず「自分はどうなのか?」という問いかけが必要である。ここでは「100点満点でどれくらいなのか?」「100点満点に近づけるためには?」というかたちをとっている。

【自分の乗り方は安全か?】①として、見通しの悪い交差点での安全確認を取り上げる。写真のようなどこにでもありそうな交差点でも、みんなで意見を出し合う中で様々な危険の可能性のあることを認識させる。さらに、自分の運転の仕方を振り返り、映像で他人の安全確認の仕方を考え、安全確認をしない理由をあげることで、交差点での安全確認の重要性をあらためて理解させる。

映像を見る前

1. 写真のような見通しの悪い交差点ではどのような危険があるだろうか？ 危険な状況は自分がつくる場合もあるし、相手がつくる場合もある。速度・安全確認・相手の動き・自分の動きなどの条件をいろいろ考えてみよう。

〈ポイント〉映像を見る前にワークシートの写真を見て、ここが「見通しの悪い交差点」で危険であるという認識を持たせたい。その際、どのような危険があるかをあげて、チェック項目を明確にしておく。出会い頭事故の発生要因(例えば、「左右を確認しない」「徐行しない」など)について理解することが重要となる。ここで出てくる答えとしては、

「出会い頭に衝突する可能性」

「他の自転車が自分の進路をさえぎる可能性」

「優先でない道路から人や自転車が飛び出してくる可能性」

「スピードを出し過ぎていると、徐行するべき場所で徐行できない可能性」

などが考えられる。

さらに、どうすれば安全になるかについても意見を求める。特に安全確認の仕方について考えさせることが重要である。

2. 自分の通学中の安全確認の仕方は 100 点満点で何点くらいだろう？

〈ポイント〉生徒は、先の設問で答えとしてあげた危険性に対して、自分の回避行動、特に安全確認が十分にできているかを考えることになる。「自分はどの程度安全確認ができているか」が、点数に反映される。

映像を見たあと

3. 映像を見て感じたことを書いてみよう。

〈ポイント〉映像は町の実景だが、安全確認がおろそかにされている例が多いことに気づくはずである。

「安全確認が不十分な人が多い」

「徐行しないでちらりと見るだけでは、車や人が出てきた時には止まらない」

「左右から他の車が出てくるのを気にしていない人が多い」

「道路の右側を逆走している人がいる」

などが考えられる。

「きちんと左右を安全確認した人は何人いたか？」と尋ねてみるのも、意見交換が活発になり有効である。

4. なぜ安全確認をしない人が多いのだろうか？

〈ポイント〉「安全確認をしない」心理と場所の特徴について考えさせる。

「たぶん大丈夫という見切りで行ってしまう」

「そのために危険の可能性が高まることを意識できていない」

「急いでいる」

「いつも車が来ないから今日も来ないと考える」

などの答えが考えられる。

5. もう一度、自分の乗り方に 100 点満点で点数をつけてみよう。

〈ポイント〉安全確認の不十分さがどこから来るのを考えた先の設問の結果を踏まえ、自分の行動に照らし、もう一度「はたして自分はどうか？」を考えさせる。点数を下げた生徒がいたら、なぜ下げたのかを問いかけてみる。また、100 点満点にするにはどうしたらよいかを尋ね、各自の行動目標を明確にする。

映像を見る前

最初に、映像を見る視点（安全行動の基準など）を定めるため、この指示マーク以降の設問については、必ず映像を見る前に生徒に問いかけること。

映像を見たあと

他者の行動を観察することで、生徒の気づきや自己理解を促したいため、この指示マーク以降の設問については、映像を提示したあとに生徒に問いかけること。

*なお、「⑤朝の校門付近」と「⑥夕暮れの帰り道」については、考える材料をイメージとして先に提示したいため、**映像を見る前**の設問は含まれない。

〈ねらい〉

一時停止を表す「止まれ」の標識は、生徒にとって最もなじみがあり、理解しない人はほとんどいないにもかかわらず、指定場所で一時停止しないことによる事故はあとを絶たない。道路交通法第四十三条にあるとおり、一時停止の標識のある交差点では、すべての車両は「停止」しなければならない。一時停止せず、設置されているミラーの確認だけでは不十分である。ここでは「安全だと思う」というような自己判断は危険であることを理解させる。

映像を見る前

1. 自宅から学校まで、いくつ一時停止の標識があるだろう？

〈ポイント〉 生徒の通学ルートにある「一時停止の標識のある交差点」を思い浮かべさせてみる。正確な数が言えない生徒が多いことが予想される。この時点ですでに無意識のうちに「止まる」箇所と「止まらない」箇所を、標識によってではなく自己判断で走行していることになるが、それを知るだけでも意識を高めることにつながる。あいまいな部分は自宅が近い生徒同士で確認し合うことも考えられる。

2. そのうち、いくつの場所で、実際に一時停止しているだろう？

〈ポイント〉 徐行して安全確認するというような自己流の確認の仕方ではなく、実際に「停止」しているかどうかを問う。

(参考) 見通しが悪い交差点では、停止線で止まると手前過ぎて安全確認が十分できないことも多い。交通法規上は、いったん停止線で止まり、安全が目で確認できる所まで進んでもう一度止まり、安全確認をしたあと、通行することになっている。

3. 一時停止している場所としていない場所では、自分の心理にどのような違いがあるのだろう？

〈ポイント〉 「いつも車が来ない（車が少ない）から、減速すれば大丈夫と思う」

「急いでいる時は、いちばん危ないと思う所だけ一時停止する」

などが考えられる。

自分なりに「ここは危ない」「ここは大丈夫」と区別していることが予想されるが、いつも車が来ないと言っても100%安全とは言えず、勝手な自己判断が危険なことに気づかせたい。

映像を見たあと

4. 映像を見て、どんなことを感じただろう？ 感じたこと、気づいたことを書いてみよう。

〈ポイント〉 「一時停止するべきなのに、していない人がずいぶん多いと思った」

「もっときちんと一時停止をしなくては危険だと思った」

「左右の確認が不十分な人が多かった」

などの答えが考えられる。多くの自転車利用者が一時停止を行っておらず、危険なことに気づかせたい。

5. 自分の乗り方を100点にするには、どうすればよいのだろう。

〈ポイント〉 「止まれ」の標識がある所で一時停止することの重要性に気づかせ、自らの行動について目標を明確にさせる。

〈ねらい〉

自転車は道路交通法上「軽車両」であり、歩行者と同じではなく、自動車やバイクと同じ車両としてのルールに従わなければならない。しかし、道路交通法第六十三条の四に、限定的に三つの場合のみ「自転車が歩道を走行できる状況・条件」が記述されており、一般にこちらの方が拡大解釈されて認知されるという状況が起こっている。「自転車は歩道を走行することができる」のではなく、「自転車は車道左端を走行することが定められていて、歩道を走行できるのは三つの場合に限った例外である」ことを、理解させるとともに、歩道を走行する際の留意点等について考えさせる。

以下のような質問を導入とするのも効果的である。

「自転車は『軽車両』で、車やバイクの仲間であり、車道を走るのが原則であることを知っていた人はいる？」（手を挙げさせる）

「自転車で歩道を走る時には、歩道の車道寄りを徐行（すぐ停止できる程度のスピード）して走らなければならないことを知っている人はいる？」

「歩行者の通行を邪魔しそうな時、停止している人はいる？」

映像を見る前

1. 通学途中、どれくらいの割合で歩道と車道を走行しているだろう？

〈ポイント〉歩道を走行している生徒が多いことが予想される。なぜそうしているのか、その理由も考えさせる。

（参考）歩道のない道路においては、車道と白線等で区別して「路側帯」が設けられていることが多いが、この問いにおいては、基本的に路側帯は歩道と同じ扱いとする。しかし道路交通法第十七条の二で、「軽車両は、前条第一項の規定にかかわらず、著しく歩行者の通行を妨げることとなる場合を除き、路側帯……を通行することができる」とあり、実は自転車にとって路側帯は、車道とも歩道とも扱いが違うことがわかる。

2. 自転車が歩道を走行する場合、気をつけなければいけないルールを三つあげてみよう。

〈ポイント〉歩行者優先で、その安全のためにどのような行動が必要かを考えさせる。

「車道寄りを走らなければいけない」

「徐行しなければいけない」

「ベルを鳴らしたり声をかけたりして歩行者の通行を邪魔してはいけない」

「危険を避けようと歩行者が立ち止まる状況をつくってはいけない」

などが正解となる。

（参考）「普通自転車は、当該歩道の中央から車道寄りの部分（道路標識等により普通自転車が通行すべき部分として指定された部分（以下この項において「普通自転車通行指定部分」という。）があるときは、当該普通自転車通行指定部分）を徐行しなければならず、また、普通自転車の進行が歩行者の通行を妨げることとなるときは、一時停止しなければならない」（道路交通法第六十三条の四 2）。「徐行」とは「車両等が直ちに停止することができるような速度で進行すること」（道路交通法第二条第二十号）である。

3. 歩行者の多い歩道を走行する時、どんな気持ちになっているだろう？

〈ポイント〉「困った」「イライラした」「邪魔だと感じた」「少しはこちらのことも考えてほしいと思った」などの答えが予想される。たいていの生徒は、思うように自転車で歩道を走行することができない経験を持っており、この問いの答えに出てくるようないらだつ気持ちを抱くことが多い。その前提には「自転車は歩道を走ることができる」という誤った理解がある。歩道を走行することは例外なのであり、歩道は完全

に歩行者中心でなければならないことを理解させたい。

映像を見たあと

4. 映像を見て、どんなことを感じただろう？ 感じたこと、気づいたことを書いてみよう。

〈ポイント〉「車道を走行できるのに歩道を走行する自転車が多い」

「歩行者にぶつかりそうになった自転車が何台もあった」

「今まで注意して歩道を走っているつもりだったが、もっと注意深くしなければいけない」

「ふつうのスピードで走ると、自転車は歩行者にとって『気をつけなければいけないもの』（＝危険物）になってしまう」

などの答えが考えられる。自分の走行と重ねて考え、危険に気づかせたい。

5. 自分の乗り方を 100 点にするには、どうすればよいのだろう。

〈ポイント〉「自転車は車道を走るのが原則。交通の状況によりやむを得ない場合などは、歩行者の通行を妨げないよう、車道寄りを徐行して走行する」という基本を守っていくことを理解させ、歩道を走行する時の各自の行動目標を明確にして行動化を図る。

〈ねらい〉

車道を走行してきた自転車は原則として車両用信号機に従う。ただし、歩行者用信号機に「歩行者・自転車専用」の表示がある場合は、これに従う。横断歩道を渡る場合は歩行者用信号機に従う。これらの原則を理解させる。

映像を見る前

1. 自宅から学校まで、いくつの場所で、信号のある交差点を右折/左折/直進するだろう？

〈ポイント〉まずは通学ルートのうち、信号のある交差点に意識を向けさせる。

2. 横断歩道を使って横断する場合は、自転車を降りているだろうか？

〈ポイント〉自らの横断方法を想起させ、課題把握の意識化を図る。

(参考) 横断歩道は歩行者が横断するためのものであり、歩行者の通行をさえぎるおそれのある場合は、自転車を押して横断する。ただし、自転車横断帯がある場合は、そこを自転車に乗って横断することができる。

3. 写真のような信号のある交差点ではどのような危険があるだろうか？

〈ポイント〉歩行者との接触・衝突に加え、この場面では信号が「歩車分離式」(車両と歩行者の通行が分けられている信号)ではないため、自動車やバイクにも気をつける必要がある。

「乗ったまま横断して、歩行者に接触したり衝突したりする可能性」

「2台以上で並進して、歩行者の通行を妨げたり、歩行者と接触する可能性」

「友達と話しながら自転車を運転して、安全確認がおろそかになる可能性」

「右後ろから来て左折する自動車・バイクに巻き込まれる可能性」

「右折してくる対向車と衝突する可能性」

「人や自転車の行き来が途切れたところで、通行できると考えた自動車・バイクがスピードを上げて横断歩道に入ってくる可能性」

などの答えが考えられる。

映像を見たあと

4. 映像を見て、どんなことを感じただろう？ 感じたこと、気づいたことを書いてみよう。

〈ポイント〉「横断歩道を自転車に乗ったまま渡る人が多い」

「右後ろから来る左折車のことを全然気にしていない」

「比較的スピードを上げて渡る自転車が何台かあった」

などの答えが考えられる。自分の走行を重ねて考えさせ、危険に気づかせたい。

5. 自分の乗り方を100点にするには、どうすればよいだろう。

〈ポイント〉信号のある交差点の横断方法について理解させ、各自の行動目標を明確にし、行動につなげられるよう導く。

〈ねらい〉

ここでは、焦る気持ちや急ぐことが事故の可能性につながることを理解させる。生徒は始業前に校門を入ろうとするため、その直前は付近が混雑することが多い。急いだ時にも落ち着いて考え、安全に配慮できること、そして、急がなくてよいような余裕のある予定を立てることが安全につながることを気づかせたい。

映像を見たあと

1. 朝、急いで登校する日は、1週間（5日）のうち何日あるだろう？

〈ポイント〉自分の毎朝のあり方をまず考える。急ぐ必要がなければ平常心を保つことができ、正常な判断もできるが、急いでいれば平静でいることが難しいことを意識させたい。

2. みんなが登校時刻に間に合わせるために急いでいて、「危ない！」と思ったことはあるだろうか？

〈ポイント〉ふだんの程度危険を意識しているかを問う。

3. 映像を見て、どんなことを感じただろう？ 自分の行動は安全か、焦った気持ちはないか、朝の校門付近の自分の姿をいろいろと振り返ってみよう。

〈ポイント〉「登校時刻に近づくと混雑してきて、危ないと感じた」

「最後、チャイムが鳴ると、自分も焦った気持ちになって見ていた」

「2列以上で並走している人がたくさんいる」

「一時停止の標識があっても止まっていない」

「よく考えれば、遅刻しないことより危険を避けることの方が大事だ」

「急ぐ気持ちはよくわかる。でもそれしか考えられないのではダメだと思った」

などの答えが考えられる。

4. 焦った気持ちを落ち着かせるために、自分に言い聞かせる言葉はないだろうか？ 友達とも話し合ってみよう。

〈ポイント〉「わけを話せば、先生もきっとわかってくれる」

「こんな日もあるさ」

「自分はともかく、他人にけがをさせるのはいやだ」

「急いでも結果は同じだ」

「明日は遅刻しないようにしよう」

などの答えが考えられる。

（参考）ストレス（ネガティブな感情経験を含む）の感じ方には個人差がある。それは、状況の受け止め方が人それぞれであることによる。したがって、対処の仕方、自分への言い聞かせ方についても、それぞれ自分に合った対処法を見つけることが大切である。また、どのような時に、なぜ、自分は焦った気持ちになるのか、自分の受け止め方の特徴を意識させることも重要である（「気持ちを意識してみよう！」（p.21）で詳述）。

5. 自分の乗り方を100点にするには、どうすればよいのだろう。

〈ポイント〉「急いだ時にも落ち着いて考えることができるため」の対策と、「急がなくてよいような余裕のある予定

を立てる」ための対策を考えさせたい。「落ち着いて考える」「余裕のある予定を立てる」などのように漠然とした答えではなく、先の設問で考えたような、気持ちを落ち着かせる言葉を考えるほか、「最後の信号で必ず深呼吸をする」「朝食を終える時間を決める」などのように、なるべく具体的な答えを導きたい。

〈ねらい〉

夕暮れ時、視界が悪くなった時の事故を防ぐために、何が必要かを考えさせる。ライトをつけて、自分の安全確認に必要な照度を確保するとともに、反射板・反射材などで自身の存在をまわりの自動車や歩行者に認知させることの大切さを理解させたい。ライトについては、自分にとって周囲を確認することができるためだけではなく、自分の自転車の存在を周囲に明らかにするためでもあること、したがって街灯があつてある程度明るくても、夕方になれば点灯しなければならないことを十分理解させる。映像では、無灯火の自転車がいかに見えにくいかを認識させたい。

映像を見たあと

1. 映像を見て感じたことを一つ書いてみよう。

〈ポイント〉「無灯火の自転車がずいぶんいると感じた」

「無灯火の自転車が暗闇の中で見えにくいのがよくわかった」

「薄暗いくらいの時間でも、ライトがついている自転車は、無灯火の自転車に比べてずっと見やすいと感じた」

などの答えが考えられる。この問題を考えるための導入としては、自分にとってどう見えるかではなく、まわりからの「見えにくさ」を認識させたい。

2. 夕方、暗くなった時のために、日頃、準備していることはあるだろうか？

〈ポイント〉反射板はほとんどの自転車についている。最近は反射板のほか、カバンや衣服につける反射材の種類もいろいろあり、フラッシングライトなどその他の夜間走行対策グッズ等もある（ただし、フラッシングライトは前照灯としては認められないので注意）。反射材などをつけるのに有効な部分（フレーム、スポーク、ホイールなど）、様々な手段などを紹介し合い、情報交換の場としたい。

3. そのほかに、周囲の安全を確認するために、自転車の乗り方を工夫していることはあるだろうか？

〈ポイント〉ここでは、周囲から自分が見えるようにではなく、「自分が周囲の安全を確認するため」の対策を考えさせる。自分自身の視界が悪くなっていることを考え、「速度を昼間よりも落とす」「交差点などでの安全確認に時間をかける」などに気づかせたい。

また、夜間に限らないが、安全のためにはいわゆる「ながら運転」をしないようにすることも大切であることに触れたい。条例でも禁止されているが、片手運転では適確な操作がしにくく、とっさの場合には対応できない。携帯電話での会話に気をとられて安全確認がおろそかになることもあり、携帯電話でのメールについては言うまでもない。ヘッドフォンで音楽を聞きながら走行することは、一見問題がないように思えるが、自転車走行中、耳から入る情報は少なくない。安全確保のためには耳も使わなければならないことを理解させたい。

（参考）道路交通法では「車両等の運転者は、当該車両等のハンドル、ブレーキその他の装置を確実に操作し、かつ、道路、交通及び当該車両等の状況に応じ、他人に危害を及ぼさないような速度と方法で運転しなければならない」（第七十条）と定められている。携帯電話で話しながら、犬の散歩でリードを手に持ちながら、傘をさしながらなどの、「ながら運転」は、都道府県の条例で禁止されている。

4. 暗闇の中で自分を目立たせるためにできることは何だろう?

〈ポイント〉先に情報交換したもので、自分になかった対策をとり入れるようにする。自転車につける反射板以外に、身につける反射材についても考えたい。対策によって、効果的であっても中高生にとって「格好いい」と思えないもの、格好はいいがそれほど効果的でないものなど、見た目と視認性（自分を目立たせる効果）のバランスについて考えるのもおもしろい。

また、衣類の色が視認性に大きく影響することにも気づかせたい。青・茶・黒など見えにくい色でなく白っぽい服を着るのも、立派な夜間の安全対策であることを理解させたい。

〈ねらい〉

事故にあわないためには、危険を予測し、どうしたら回避できるかを考え、行動に移すことが大切である。そのためには目の前の歩行者や自動車に着目し、相手の心理と行動を想像し、様々な展開を予想する力が必要となる。ここでは参加型の学習形態により、危険予測及び回避能力がどのようなものかを理解させる。

危険予測には想像力が求められる。「例えば、駐車車両が宅配業者の車だとして、車の中には忙しく配達伝票を確認して配達物を取り出しているドライバーがいると想像してごらん」というような導入が有効である。この場合なら、ドライバーは、配達物の確認が終われば出てくることになる。と考えると「なんだかドアが開きそうな気がする」ということが想像できる。

そこでは、相手の行動の特徴についての予備知識があると、想像力を働かせやすくなる。高齢者は視野が狭くなっていてまわりの変化に気づきにくいことが予測される。タクシーは、客を見つければ急に減速して道路左端に寄ってくるかもしれない。また乗客の指示に従って、急発進したり急に曲がったりすることも考えられる。人間はまわりの世界を見る時、カメラなど機械のレンズとは違う見方ができる。

以下の問題では、映像と同じ場面の写真を見て「この辺が危ない」と予測される箇所に○をつけ、予測される事故を防ぐためには、どのような行動が求められるかを練習させる。危険予測における気づきのレベルに応じて難易度をおよそ三つのレベルに分けた。生徒の実態に合わせて活用してほしい。

場面1 歩道を走行中、前方の路地に……

難易度★



○……前方左の路地で一時停止している自動車

歩道の車道寄りを徐行して走行している。前方左に路地があり、見通しは悪い。路地の停止線には自動車が停止しており、優先道路に出てくることが予測される。こちらが優先だが、見通しが悪くて相手から確認できているかは不明なので、いつでも止まれる準備をしておくことが必要である。

場面2 坂道を降りていくと、前方にゴミ集積所が……

難易度★



○……左側のゴミ集積所、道をへだてた右側の高齢者（2か所を結んでもよい）

前方にゴミ集積所があるということは、時刻によってはゴミを出す人がいるはずである。向かいの家から高齢の女性がゴミを持って出てきたが、行く先はゴミ集積所であることが予測される。ゴミ集積所と女性の間を通る際に減速するか、そのラインを横切らないようにいったん停止して女性が通り過ぎるのを待つべきだろう。

場面3 交差点では小学生が横断していて……

難易度★



○……交差点の小学生、左側の路地（2か所を結んでもよい）

前方の交差点を小学生が横断している。小学生は後ろを振り返って何か言い、手招きしている。後ろから友達が来ていることが予測される。前方に見えている小学生に気をつけるのはもちろん、この小学生が渡り終えても、あとから続いてくる小学生がいると予想し、交差点手前で停止して、左側の路地を確認してから進むべきだろう。

場面4 交差点を直進するが……

難易度★



○……対向の左折車

横断歩道の自転車横断帯を横断中、対向車が左折のウィンカーを出している。自転車が優先だが、自動車のドライバーにこちらを確認して停止する意図があることを確認できるまでは、減速して様子を見るべきだろう。

場面5 交差点を右折しようとして……

難易度★★



○……交差点左右、右後方確認

左側を走行して交差点で右折しようとしている。進行方向には何もないが、交差点手前ではいったん停止して左右の路地に人や自動車がないか、安全確認する必要がある。また、その時後ろも振り返って安全を確認する。映像では後続自転車が右側から追い越して直進していく。

場面6 歩道を走行中、前方には小さな子と母親が……

難易度★★



○……前方の親子、左側駐車場から出ようとしている車

車道左側の歩道を徐行している。すぐ前の幼児と母親をよけて歩道のさらに車道寄りを行こうとする。しかし、親子連れの先には駐車場があり、自動車の先が見えている。ということは、母親は自動車を避けるだろうから、その進路は右に膨らむことが予測される。親子の動きに十分気をつけながら進路をとり、場合によっては停止するべきだろう。

場面7 前方の停車車両の横を通過しようとして……

難易度★★



○……停車車両、左手の人影、右後方確認

車道左端走行中、前方に停車車両がある。後方を確認し、進路を右にとるところだが、自動車の左で人影が動く。ということは、道路を渡るか自動車に乗るかだと予測しなければならない。減速、場合によってはいったん停止して、確認してから発進するべきだろう。映像では人影は停車車両の陰から現れて車に乗る。

場面 8 歩道を走行中、駐車場に入る車が……

難易度★★



○……前方の親子、右折しようとしている対向車、左手の駐車場入り口
車道左側の歩道を徐行して走行している。前方には子どもを抱いた母親が歩いている。対向車が右折のウィンカーを出しているの、左手にある駐車場に入ってくるのだろう。そこで母親は足を止める。駐車場であれば出てくる車もあるかもしれない。いったん停止して対向車の右折が終わってから、左右の安全を確認し、親子に気をつけて走行する。

場面 9 タクシーの横を通る時……

難易度★★



○……タクシーのウィンカー、路側帯
車道左端走行中、前方にタクシーが、左ウィンカーを点滅させて停車している。左には路側帯のスペースが空いている。後ろから自動車 coming している時などは路側帯を通りたいと考えるかもしれないが、タクシーのウィンカーを見ると、客が降りてくることが予測される。減速もしくは停止してタクシーの中の人の様子を確認してから走行するべきだろう。映像ではこのあと後部シートで人影が動き、ドアが開いて乗客が降りてくる。

場面 10 交差点を直進するが……その 2

難易度★★



○……左後方確認、対向車
自転車横断帯を横断中、左から右折車、交差点にも対向左折車がある。減速してこれらの動きをよく見て、安全が確認できてから横断する。

場面 11 直進中、前方にハザードランプをつけた車が……

難易度★★



○……停車車両、ハザードランプ
車道左端走行中、前方に停車車両がある。ハザードランプが点滅している。何らかの理由で一時的に止まっている可能性が高い。いったん停止して自動車の動きを確認してから発進するべきだろう。映像ではこのあと、停車車両がハザードランプを消し、右ウィンカーをつけてすぐに発進した。

場面 12 前方の停車車両の横を通過しようとして……その2

難易度★★



○……停車車両、対向車、右後方確認

左側走行中、前方に停車車両があり、対向車が来ている。停車車両があるから進路を右にとらなければならないが、減速して対向車が通り過ぎるのを待つ。後ろを振り返って安全確認し、タイミングによっては一時停止する。映像では対向車が通り過ぎてすぐに後ろから車が来たので、それが通り過ぎるのを待ってから走り出すべきだろう。

場面 13 前方の停車車両のブレーキランプが消えた……

難易度★★



○……停車車両のドアとブレーキランプ、対向車

左側走行中、前方に停車車両があり、対向車が来ている。対向車が通り過ぎるのを待って、右に進路をとるところだが、停車車両のブレーキランプは今消えたばかりである。ということは、ドライバーがドアを開けて出てくる可能性がある。いったん停止して、ドアの開閉を確認してから発進する。

場面 14 交差点を直進中、前方のトラックが……

難易度★★



○……トラックの左ウィンカー、前方の交差点、トラックと歩道との間のスペース

車道左端を走行中、前を走っているトラックの左ウィンカーが点滅している。トラックが左折しきるのを待つため、減速もしくはタイミングによっては停止するべきだろう。映像では、トラックは左折のために速度をゆるめ、内輪差を計算していったん右に膨らみ大回りで左折していく。歩道との間に一瞬できたスペースに入ってはいけないことは言うまでもない。

場面 15 交差点を直進中、前方に数台の自転車が……

難易度★★★★



○……前方に行く自転車群の最後尾、右から左折してくる自動車と点滅するウィンカー

自転車横断帯に入るところで、前方を数台の自転車が横断していく。左折しようとしている自動車がある。自動車は自転車が途切れたので左折しようとするかもしれない。ということは、急いで前方の自転車に続こうとするのは危険である。自動車の動きを見極め、こちらの存在を認めて一時停止したのを確認してから、あるいは左折車が行ってしまってから横断するべきだろう。

場面 16 交差点を直進中、すぐ隣にはワゴン車が……

難易度★★★



○……並走していた左折車、その向こうに潜んでいる対向車、信号
車道左端を走行中、交差点を横断する。並走していたワゴン車が自転車を追い越して左折のウィンカーを出している。こちらは減速し、内輪差で巻き込まれないよう、交差点の少し手前で停止する。この左折車があるために対向車が見えないことにも留意するべきであろう。映像の続きでは、車が左折するところで、その向こうに対向の右折車が見える。こちらを確認して一時停止することがわかってから直進するところだが、信号を見ると黄色である。対向右折車は「行ける」と考えて急いで右折してくるかもしれない。それならば、次に信号が青になるまで待つべきだろう。

場面 17 歩道を走行中、親子を避けて車道に……

難易度★★★



○……前方の親子、左側駐車場から出ようとしている自動車、車道から駐車場への入り口、車道後方確認
車道左側の歩道を徐行している。前方には幼児と母親が歩いているので車道に出ようとする。母親は左手の駐車場の出入り口から車が出てくるのを見て、幼児を抱き上げ、その進路は右に膨らむ。車道に出る際には、親子連れの動き、駐車場から出てくる自動車だけでなく、車道から駐車場に入ってくる自動車があり得ることも考えなければならない。また車道後ろから来る自動車にも十分な注意が必要となる。不用意に車道に出るのは非常に危険である。

場面 18 交差点を直進中、対向車が止まってくれたので……

難易度★★★



○……横断歩道を渡る歩行者、対向右折車（2点を結んでもよい）、右後方確認
車道左端を走行中、交差点を横断する。向かいから歩行者が横断歩道を渡ってきている。対向車が右折しようとして待っている。対向右折車のドライバーの視線は歩行者に向けられていて、こちらの自転車は視界に入っていない可能性がある。減速し、右折車の動きを見ながら、ドライバーがこちらを確認して一時停止することがわかったら直進する。また、この時、右後ろから来る左折車にも注意しないと、巻き込まれる可能性がある。映像では、いったん停止したところで、後ろから来た自動車が追い越して左折していく。

〈ねらい〉

イライラや焦り、怒りや不安は、ネガティブな感情であり、ストレスの一部として分類される。日常には様々なストレス場面があり、ストレス状態は行動の安定性を下げ、交通行動を危険なものにする。危険を防止するためには、「安全確認をする」「一時停止をする」などの行動や交通ルールの知識以前に、安全確認をしなかったのはなぜか、一時停止を忘れた背景にはどのような心理状態があったかなど、ストレスの状態に着目することが重要となる。そのため、自分がどんなことにより強いストレスを感じるか、様々なストレスに対してどのように対処しているかについて考えさせる。また、ストレスを軽減する努力は事故防止に効果的だが、それでもゼロにすることはできない。ストレスを感じた時に自分でそれを認識して、ある程度コントロールできれば、危険を回避できる可能性は高くなることを理解させたい。

各自がテストに答えたあと、グループワークなどで結果や対処の仕方を話し合う時間を通して、ストレスコントロールの方法に気づかせたい。

(参考) 小川和久「安全教育とライフスキル ―情動への対処の学習が生徒のストレス感と自己効力感に及ぼす効果―」(「安全教育学研究」第9巻第1号、2009)で発表された「ストレス診断テスト」(一部改変)を用いた。小川は約80人の高校生を対象にこのテストを実施し、テストを含めた50分間の授業によりストレス感が低下し、自己効力感*が向上する結果を得ている。「グループワーク時の反応は積極的で活発であった。他者の対処戦略を参考に、自分はどうしてきたのか、またどうするのがよいのかを考える機会となっている。このプロセスが意識の変化に大きく影響したのではないかと推察する」と述べている。

*「自己効力感」

要求された課題に対して「なんとかできる」と意識する感覚。課題を達成するために必要な手順を具体的にイメージできる能力。取り組んでみようとする実行の動機を生じさせるものとなる。

「わ！ 寝坊した！ 授業に間に合うか？」

時間的プレッシャーに起因する焦燥感／学校での評価

「家を出る前にまた親とケンカ。まったく頭にくる！」

保護者との関係悪化

「部活に遅刻しそう！ みんなに迷惑かけてしまう！」

時間的プレッシャーに起因する焦燥感／部活動での責任感

「なんか体調悪い……やることたくさんあるのでどうしよう」

体調不良／学業その他の負担感

「仲のいい友達と気まずい関係に。困ったなあ……」

友人関係のトラブル

「テスト期間なのに寝過ごした。テストを受けられないかも！」

時間的プレッシャーに起因する焦燥感／教師の対応への不安

「先生に呼び出されて注意された。なんで私が!？」

教師の対応への怒り・不満

「大事な友達との約束時間に間に合わないかも! 絶体絶命!」

時間的プレッシャーに起因する焦燥感/友人関係

「試験がうまくいかなかった。将来のこと考えるとへこむ……」

学業に対する不安/自己肯定感の低下

〈ねらい〉

性格や感じ方は人それぞれで、ストレスへの対応やストレスによってどのような状態になるかも個人差がある。ここでは、「ふだんの自分」の性格や感じ方を意識させ、一見関係がないように見えるそれが、安全な行動や危険防止にどのようにつながっているかを認識させる。

このテストは成績とは関係がなく、結果の良し悪しを評価されることはないことを生徒に明らかにしておきたい。評価されたり批判されたりすることさえなければ、自分の性格分析は、多くの生徒の好むところである。重要なことは、「性格に良し悪しはないこと」「性格的な特徴には、正と負の側面があること」「程度が過ぎると、負の側面が強くなること」である。このことをよく意識して生徒の取り組みをサポートしたい。

またたいていの場合、どこにどう〇をつけたとしても、どの生徒にも事故につながる要素はあるという観点から、方策を話し合う必要がある。

以下、各項目がどのような心理特性と関係しているか、参考までに解説する。

「危ない場面でも、うまくかわすことができる」

とっさの判断に優れていれば危険を回避する可能性は高くなるかもしれないが、ここで「5 よくあてはまる」に〇をつけた生徒は、「危ない場面でも、うまくかわすことができる生徒」ではなく、「自分で、危ない場面でもうまくかわすことができると思っている生徒」であることに注意したい。したがって、判断力に優れ事故を回避する可能性がある一方で、過大評価が油断につながる可能性もある。

「1 全くあてはまらない」に〇をつけて、自分がとっさの判断に弱いと意識している生徒は、そのように意識していたために慎重に、焦らずにすむような計画を立てることも十分に考えられる。

『「危ない場面でも、うまくかわすことができる」で5に〇をつけた人は、事故を起こしにくいと思う?』と最初に問いかけ、「とっさの判断はとても大切だね。『危ない!』と思っても冷静に判断できれば、事故を避けることができるかもしれない。でも自分には切り抜けられると油断したために不注意になることもよくある」と例を示し、「1」「5」に〇をつけた人のいろいろな可能性について答えさせるような指導が有効であろう。

「ルールはきちんと守りたい」

まじめに物事に取り組むことを示しており、交通ルールを大切にすることにつながるので、安全のためには欠かせない姿勢である。しかし例えば、登校時刻や友達との約束を守りたいがために急いだり焦ったりしてしまい、その際に安全が二の次になることもあり、性格特性には正の側面と負の側面が共存する典型的な例であると言える。今何を優先すべきか、冷静に判断する力を身につけてほしい。

「あてはまらない」とした（「1」か「2」に〇をつけた）生徒は、公共のルールに対してルーズなのかもしれない。一方で自分が大切にしているルールがどこかにあるはずである。たいていの場合、ルールを大切にできないと言うよりも、納得していないとか、強制されることに対して反発があるなど、別の要素が関係していることが多い。

「仲間から離れたら追いつこうとする」

仲間との協調性や親和欲求と関連するが、「必要に応じて自分のペースを保つ」ことに欠ける側面も含む。友達と一緒に自転車で走行する場合を考えると、安全確認不足や周囲への不注意につながりやすい。こ

の危険性をよく認識させることが重要である。まずはそのような心理が「ある」ことを意識させ、「追いつかなくてはと思った時が危ないことをよく理解するように」などと、直接的な言葉で指導したい。遅れた時に「ちょっと待って」「先に行って」などと声をかけることで、本人の焦りが軽減されることも多い。同時にこれが自然な感情であることを伝え、生徒の心理に理解を示したい。

「ムシャクシャした時、何かを蹴飛ばしたくなる」

性格特性と言うよりは、ストレスへの対処のあり方と言える。「ムシャクシャ」は、自分の思うとおりにならない状況で起こる感情である。その時にどうするかは人それぞれで、誰とも会わずに自分の部屋にこもる人もいれば、この例のように何かを蹴飛ばしたくなったり弱者に当たりたくなったりと、身体によって怒りを解消しようとする人もいる。

スピードのもたらす爽快感による解消も、身体による方法の一つと考えられる。

しかし、「自転車を猛スピードで走らせたなら気持ちがすっきりする」ことが危険であることは言うまでもない。生徒にとっても危険性の理解は容易であろう。いかに人通りの少ない道であっても公共の場であり、自分のストレス解消のために安全を犠牲にしたり他人を危険にさらしたりすることは、やはり許されないことを理解させたい。自分も他人も傷つけず、物も壊さないストレスの解消方法としてどんなものが有効か意見を出し合い、日頃から別の方策を探しておくことの必要性に気づかせる。

「自分のペースで歩けないとイライラする」

歩くことに限らず、「自分のペース」にどの程度固執するかもまた、個人差のあるところである。几帳面で物事を計画的に片づけていく人も、自分のペースが崩されることに強いストレスを感じることもあるかもしれない。

しかし、こと自転車走行となると、周囲の歩行者や自動車に気を配りながら安全を確保する必要がある。特に歩道での走行においては、自転車が「車両」であり、歩道での走行はあくまで例外であって、歩行者の通行を妨げないように車道寄りを徐行して走るべきであることを、もう一度確認させたい。

「友達の前で恥をかきたくない」

この項目で「あてはまる」とする（「4」か「5」に○をつける）生徒は相当数いると予想される。たいていの人の心の中にある自然な気持ちであるが、特に思春期には顕著に見られることがあり、中高生らしい感情だと言える。最近の子どもには集団から疎外されることに対して極端に気を遣う傾向があるという意見もある。

この感情は、「友達に侮られたくない」「友達の前でプライドを保ちたい」などの意識とつながっていることが多く、そのため生徒たちはわざと危険行為を試し合うことがある。また時には「大人の言うルールをきちんと守る」ことが、友達に侮られる要因になる。

ただ自転車に関して言えば、自動車や刃物などと同じように危険な道具であり、試し合いには適さないことを十分理解させる。また、ルールについては、「誰がつくったか」に左右されることなく、なぜそのようなルールがあるのかを自分で考え、社会を構成する一員として他人や弱者への配慮が大切であることを理解させたい。

「友だちといるより一人の方が好き」

自分の世界に入り込む幸福感を知っていることを意味する場合や、他人との摩擦などに使うエネルギー

をわずらわしく感じることを意味する場合などがある。中高生が、友達と行動を共にしている時に冷静な判断を失いやすい、あるいは安全確認が不十分になりやすいことはよくある。おしゃべりに夢中になったり、遅れないように気を遣ったりする間に、安全に対する意識が下がることが多い。その点で一人である時の方が注意深くなることのできる可能性はあるが、別の側面もある。特に一人であることが好きな生徒は、自分の世界に意識を集中させることや、ぼーっとする時間を楽しんだりすることが多く、周囲への意識が失せてしまうこともあるので、歩行中、自転車走行中は、周囲の状況に意識を向けるよう注意が必要であることを認識させる。

「多少つらくてもがんばることができる」

いわゆる「努力家」タイプで、学習においても部活動などにおいても、「つらくてもがんばる」ことのできる力は、通常は、ほめられるべき資質であり、本人の能力を伸ばし大きく成長させることが多い。しかし、一方で、心の余裕を確保しない、または身体及び精神状態の不調に目をつぶるような可能性も含み、無理な行動計画を立てて行動してしまう危険性がある。

「安全」においては、まず自分の状態の把握が第一歩となり、不調があるならば、その不調がどのような危険の可能性につながるかを予測して備える必要がある。「がんばる」力は維持しつつ、「時間的に無理をしていないか」「疲れがあるのに無理をしていないか」など、自分を冷静に見つめる力をつけることの重要性を認識させたい。

「いつものやり方を変えるのは面倒くさい」

同じことを同じように繰り返すことに安心感を覚えるのかもしれない。その意味では保守的とも言えるが、確かに「変える」ことはそれ自体、エネルギーを必要とする。面倒と思えば、いつも止まらない所で自転車を止めることも、気にしていなかった他人に配慮したり、ルールを考えたり、こうした安全教育を通して自分のこれまでの習慣を変えることも面倒と感じるはずである。

しかし、何と言っても、事故こそが最大の面倒なのであり、少し先にある大きな面倒を避けるために、目の前の小さな面倒をがまんするという発想の転換が重要であることを理解させたい。

「けがや病気が心配」

「怖がる」ことは、特に生徒たちの世代においては、評価されないことが多い。大胆であること、怖いものがないことが、「すごい」と言われる傾向がある。「けがや病気が心配」という生徒は、身体感覚に敏感だったり、想像力が豊かだったりする。自分や他人が傷つけられること、血や痛みを生々しく感じるということができるという意味では、自然で豊かな感性の持ち主とも言える。

「怖がる」気持ちは危険を回避するにあたって重要な資質である。ちょっとした不注意が大きな事故につながる恐ろしさは、性格特性にかかわらずできるだけ意識させておきたい。

一方で、怖がり過ぎることで冷静さを失い、注意力が落ちるケースもある。自転車走行においては、その気持ちとどう向き合って自転車という道具を使うかが問題であることを認識させたい。「怖がる」気持ちの大切さを示しつつ、よき自信をもち、無用な不安をなくせると、平常心を保つことができることを理解させる。

また、「怖がらない」とした（「1」か「2」に○をつけた）子どもに対しては、適度に「危なさ」を意識することの大切さを示しつつ、ルールを理解し危険予測や感情コントロールをきちんと学べば、怖がらないことが適確な判断につながり得ることを理解させたい。

「少しぐらい無理をしても、うまくやりとげたい」

「多少つらくてもがんばることができる」と一見似ているようだが、「うまくやりとげる」というのは、他人の目を意識していると言える。努力するエネルギーの源に、他人の評価が含まれていると言ってもよいかもしれない。しかし日常生活では信頼を得ることのできるこうした意識は、リスクテイキング（あえて危険な行動を選択すること）につながる傾向がある。登校時刻や約束の時間に遅れそうな時、危ないとわかっていても間に合わせようとして、止まらない、信号無視をする可能性があるという問題である。性格的な側面はなかなか変えられない面もあり、焦る気持ちをなくすことは難しい。しかし、要は焦った気持ちであっても、自分の行動をコントロールできればよいので、「焦る気持ちをなくせ」と指導するより、「焦った時の行動をコントロールする方法を見つけよう」と指導する方が現実的である。リスクをとることによる利得（遅刻しなくてすむなど）よりも、安全であることの方が、はるかに大切であることを理解させる。

「ワクワクするような冒険をしてみたい」

人は単調な生活よりも、刺激のある新しい活動を求める側面がある。新しいことに挑戦することは、生活が活動的であり、活発であることを意味する。内向き社会と言われる今日、生徒のそうした積極的な姿勢は、長い人生を歩んでいく上で高く評価される面がある一方、度を越えた挑戦はリスクを伴うことを理解させる必要がある。

特に身体的に危険を伴う活動を楽しんだり、ワクワクしたり、興奮を求める傾向性は、交通場面での危険行動と関連することが指摘されている。「下り坂で自転車のスピードを出すと、危ない、怖いと感じる一方で、スピードを楽しんでいる自分はいないだろうか？」などの問いで振り返らせたい。見通しの悪い交差点での走り方、歩行者の間をすり抜けるような走り方、信号の変わり目で突っ切る走り方などについてこれを機会に想起させ、人生を送る上で新しい挑戦は歓迎されるが、交通場面での挑戦は歓迎されないことを理解させる。

〈ねらい〉

ストレス反応は、それについて振り返ったり考えたりすることで、多少の差はあれコントロールすることができる。「コントロールすることができる」感触を得ることで、ストレス感もまた低下する。そのことは危険防止において重要な要素である。ここでは具体的に「焦る」気持ちを取り上げ、コントロールの方法を理解させたい。

1. 映像のようなことが起きた時、どんなことを思い浮かべるだろう？

〈ポイント〉「先生に怒られる」「遅れて教室に入った時、みんなの注目を浴びる」「みんなに軽蔑される」「試験に集中できず失敗する」「待ち合わせをしていた友達に嫌がられる」など映像にあるもののほか、できるだけたくさん答えを出させ、自分の心理を解き明かさせたい。大切なことは、焦りの感情が生まれてしまうその原因を探ることである。何を意識するから焦ってしまうのか、状況の受け止め方について、自分の特徴を理解することが重要である。

2. 焦って急いだ時、自分の自転車の乗り方はふだんどう変わるだろう？

〈ポイント〉強いストレスを感じている時、それによって安全が二の次になりやすいこと、ひいては事故の可能性が高まることを具体的に確認する。「赤信号でも横断してしまう」「歩行者の多い路地でもスピードを落とさない」「一時停止の標識を無視する」「ベルを鳴らしながら歩道を走る」などが答えとなるだろう。

3. 落ち着くために自分に言い聞かせる言葉には、どんなものがあるだろうか？

〈ポイント〉例えば遅刻しそうだという場合、ストレス感、遅刻そのものよりも、遅刻によってもたらされる状況を予想して高まることが多い。その状況に対する解決策が見つかれば、ストレスは軽減されることになる。ここにストレスコントロールのヒントがある。実際、少し見方や考え方を変えれば、そう大きな問題ではないことも多々ある。どのような論理で落ち着くことができるかは個人差があるので、できるだけ自分に合った解決方法を見つけられるよう助言する。

4. 友達と出した答えを比べてみよう。

〈ポイント〉友達の答え（同じストレスに対する異なる対処方法）を参考にすることより、自分の対処方法を振り返り、新たな方法を得ることがあることを理解させる。また、ある問題に対するコントロールに成功すると、他のストレスに対しても対処しやすくなる傾向があることも伝えたい。

例としてあげたもののほか、以下のような答えが考えられる。

「わけを話せば、先生もきっとわかってくれる」

「安全第一だ」

「急がば回れ、だ」

ここでの DVD 映像の使い方については、生徒の反応や教育効果等を考慮しながら、「映像を一時停止して問いかける」「映像を繰り返し提示する」「映像を提示するタイミングを調整する」など、適宜、必要に応じて工夫することが望ましい。

〈ねらい〉

ワークシートにある「小さな子どもは大人の行動をまねて学んでいく」は、子どもの観察学習（モデリング）の原理を示している。ここでは、自分にとっての交通安全から少し視野を広げ、成長とともに増していく地域での責任を取り上げる。小さな子どもにとっては、中高生は「大きいお兄さん、お姉さん」である。そこでルールに則った行動を示し、小さな子どもたちの安全意識を育てていくことは、その地域全体の安全につながるものであることを理解させたい。

1. 小さな子どもに見られていると思うと、人は「いつもより正しく行動しなくては」と思う。もし近所の子どもと一緒に通学するとしたら、自分の行動を変えなくてはいけないと思う場所とその行動をあげてみよう。

〈ポイント〉大人でも、小さな子どもがそばにいと、無意識のうちに、「こういう姿は子どもに見せてはいけない」という心理が働く傾向がある。中高生はまだそうした意識が育っていないことが多いが、知り合いの子どもと一緒にいるような場合は、責任を感じる事が多く、親密さが深まるほどその傾向が強くなる。ここではそのような心理に基づき、自分の行動を振り返る。

例えば、

場所) ○○の交差点

行動) いつも斜めに右折しているが、正しく二段階で右折する

などのように、できるだけ具体的に答えさせたい。

2. 小学生に道路での自転車の乗り方を教える時、自分なら何を教えるだろう？ 三つあげてみよう。

〈ポイント〉教えることは最大の学びである。子どもに何を教えるかを考えるには、「何が最も重要か」を考えることになる。これまで学んできた様々なことを、もう一度整理し直すよい機会になるはずである。

ここでの DVD 映像の使い方については、生徒の反応や教育効果等を考慮しながら、「映像を一時停止して問いかける」「映像を繰り返し提示する」「映像を提示するタイミングを調整する」など、適宜、必要に応じて工夫することが望ましい。

〈ねらい〉

危険を予測する上でも、また歩行者や自動車の通行を妨げずに、安全で責任ある自転車走行を行うためにも、他者の視点を想像し理解することは重要である。ここでは映像を使って他者の視点を体感し、様々な視点から安全について考える機会としたい。時間が許せば、何回か同じ映像を流すと、見落としていたこと、聞き逃していたことに気づくことが多い。

1. 映像で見た「子どもの視点」から、どんなことを感じただろう？

〈ポイント〉「視線が低い」「目の位置が自転車のタイヤの高さにある」「大人や車が大きく見える」「見上げないと何が起きているのかわからない」などの答えが考えられる。

相手の立場で自転車を見ること、相手の感じ方から自転車の乗り方を考えることにつなげたい（以下同様）。

2. 映像で見た「高齢者の視点」から、どんなことを感じただろう？

〈ポイント〉「急な飛び出しなどに対して自分たち以上に怖い思いをする」「視線の動き（見て認知していく速さ）が遅い」「視線の動きが時々止まる」「視線がゆらゆら動く（安定しない）」「視野が狭く、急に視界に自転車が入ってくる感じ」などの答えが考えられる。

3. 映像で見た「障害者の視点」から、どんなことを感じただろう？

〈ポイント〉視覚に障害がある人にとって、音は周囲の状況を把握するための重要な情報源であること、白杖の大切さに気づかせたい。また聴覚に障害のある人は、周囲からは障害があることが見えないため、障害のない人と同じように扱われてしまうことがあり、危険防止がより難しいことを理解させたい。

視覚障害者については、「音は、周囲を理解するために重要な情報」「白杖は、視覚障害者にとって、とても大切」「白杖の先でたくさんを感じている」「人がすぐそばを通り過ぎると、怖い感じがする」「白杖が他の歩行者に引っかかりそうで怖い」「弱視という視力が少しだけある人は白杖を使わないので、見た目には障害があることがわからず困ることがあることは、今まで知らなかった」などの答えが考えられる。

聴覚障害者については、「話す時に手と目を使うため、障害のない人に比べて安全の確保が大変だと思った」「耳からの情報がないことで怖い思いをすることが多いだろうと思った」「歩行者の中にはこのような人もいて、歩道を走行する際にはもっと注意しなければならないと思った」などの答えが考えられる。

4. 映像で見た「自動車ドライバーの視点」から、どんなことを感じただろう？

〈ポイント〉「歩道から車道へ出る時にはもっと注意しないといけない」「自転車とすれ違う時、接触しそうで怖い」「自転車が右側を逆走するのは迷惑」「車体の幅を考えるのがむずかしそう」などの答えが考えられる。

ここでのDVD映像の使い方については、生徒の反応や教育効果等を考慮しながら、「映像を一時停止して問いかける」「映像を繰り返し提示する」「映像を提示するタイミングを調整する」など、適宜、必要に応じて工夫することが望ましい。

〈ねらい〉

他人を助けて安全を守ることを考える。中高生は、成長の過程にあり、体力的にはすでに大人に近づいている。社会的責任を自覚し始める時期に入り、自らの安全から他者の安全に視野を広げさせたい。ここでは身近な地域での危険について認識して、対応する方法を理解させる。

1. 今朝の通学途中、小学生以下の子どもを何人くらい見かけたか（あいさつを交わした子どもを含む）？
2. 今朝の通学途中、70歳以上と思われる高齢者を何人くらい見かけたか（あいさつを交わした人を含む）？

〈ポイント〉通学途中、いかに弱者の存在を認識しているかを問う。中高生では、まだまだ自分のことだけで精いっぱいということが多く、なかなか他者を助けるところまで意識を向けることはできないことが予想される。「見えていないことが多いと思うけれど、だんだんにできるようになろう」というように、生徒の心理に沿った指導が望ましい。

3. 通学路で、小さい子どもや高齢者、障害のある人などにとって危険な場所をあげてみよう。

〈ポイント〉前項で学んだいろいろな人の視点を利用して考えさせたい。例えば、「子どもの低い視線を考えると、あの標識は目に入りにくいのではないか」「高齢者の視点で考えると、エンジンの音が聞こえても振り返って車の位置を確認するのが遅れるのではないか。だとすると、〇〇の路地から出てくる車に注意した方がよい」「〇〇通りは自転車を飛ばしている人が多く、特に障害のある人は恐怖を感じるだろう」のように具体的に答えさせたい。

4. 他人を気遣うためには、こちらにどんなことが必要だろうか？

〈ポイント〉他人を助けるためには、小さい子ども、高齢者、障害のある人などについて、正しい知識としっかりとした考えを持っていなければならない。また当然、自分の安全を守ることができなくてはならない。心理的・時間的に余裕があることも重要になる。

「他人の安全を守る」の映像は、「見えているもの、見えている世界が違う」の映像内に含まれている。

ここでのDVD映像の使い方については、生徒の反応や教育効果等を考慮しながら、「映像を一時停止して問いかける」「映像を繰り返し提示する」「映像を提示するタイミングを調整する」など、適宜、必要に応じて工夫することが望ましい。

〈ねらい〉

これまで学んできた交通の危険予測の方法を応用して、防犯の危険予測の力を身につけさせる。また、設問に取り組むことで、防犯の意識を高めさせる。

1. ある日の夕方。大通りから路地に入ると人通りは少ない。ビルの隣にある駐車場で、男子高校生が友達を待っている。ヘッドフォンで音楽を聞きながら、携帯電話でメールをチェックしているようだ。

上のイラストを見て、防犯の観点から危険を予測しよう。どのようなことが考えられるだろうか？

〈解答例〉人通りも自動車の通りも少ない路地にある駐車場で、自動販売機と駐車車両の間には人目につきにくく、何か事件に巻き込まれても他人にわからない可能性が高い。駐車場は照明がなくて薄暗い。またフェンス等がないことも、犯罪者にとって近づきやすく逃げやすい状況をつくっている。さらに、ヘッドフォンをつけて音楽を聴きながら携帯電話の画面を見ているのでは、不審な人や自動車が近づいてきてもわからない。人目につきにくい場所に一人であること、視覚・聴覚を危険予測と安全確認のために使えない状態は危険である。

2. 日が暮れて夕闇の濃くなる中、雑木林沿いの道を女子中学生が自転車で家へ向かっている。住宅地ではあるが、灯りや声はほとんど漏れてこない。前方に1台、駐車車両がある。中に人がいるかどうかはわからない。

上のイラストを見て、防犯の観点から危険を予測しよう。どのようなことが考えられるだろうか？

〈解答例〉道の片側は雑木林、向かい側は住宅地で人がいるはずだが、壁や生け垣が高く、声を出しても誰かに聞こえそうな感じがしない。また、一本道で逃げ場がない。街灯も少ない。後ろからひったくりのバイクなどに襲われそうな雰囲気である。駐車車両から急に人が出てきて襲われることもあるかもしれない。暗くなってから一人で帰り道に使うのは、危険なルートである。

〈ねらい〉

ここでは事件や事故の起こりやすい夕方以降の行動について考えさせる。学校や自宅周辺の危険箇所を認識し、どんな危険があり、それをどう防ぐかを具体的にあげさせることにより、暗くなってからの防犯を理解させる。

1. 学校や自宅周辺で、防犯上、「夕方通るにはちょっと危ないかな」と思う場所をあげてみよう。

〈ポイント〉 どこに危険の可能性があるかを予測することが危険防止の第一歩である。交通安全における危険予測についてワークシート p.8～p.12 で学んだが、この問いも広い意味での危険予測と言える。書いた答えについて、なぜ危険だと思うか、そこを通らないほかのルートはあるかなどについて話し合い、解決方法を導かせたい。

2. 上であげた場所を避けると、何分くらい多くかかるだろう？

〈ポイント〉 暗い道、人通りの少ない道を避けることは原則である。しかし、学校や部活の帰りで急いでいたり疲れていたりすれば、早く帰ることができる道を通りたくなるのも理解できる。具体的に何分長くかかるのか数字を出してみることで、リスクと時間・エネルギーを相対的に考えさせることも効果的である。

3. 多少はともかく危険があることがわかっているのに夕方以降に外にいる時、どんな気持ちになっているのだろう？

〈ポイント〉 映像にもあるように、夕方寄り道をするなど安全を二の次にする理由でいちばん多いのは、友人関係に関わることだろう。友達との約束は、この時期の生徒にとって、学校や家族との関係よりも優先される場合がある。どんな気持ちになっているかを書き出すことで、そのことをあらためて自身で認識できる。その関連の答えとしては「友達との約束を守らなければ」「借りていたものを返さなければ」「裏切ってはいけない」などが考えられる。

4. 設問3.の時、出かけなくてすむ解決方法はあるだろうか？

〈ポイント〉 いざその場になると「行く」ことしか選択肢がないように思えても、クラスで話し合う場合には、比較的冷静に状況を考えられる可能性がある。実際、よく考えてみると第二、第三の手段があるものである。ひと言連絡をすればすむこともあるし、明日に延ばしても大丈夫であることも多い。

ここでのDVD映像の使い方については、生徒の反応や教育効果等を考慮しながら、「映像を一時停止して問いかける」「映像を繰り返し提示する」「映像を提示するタイミングを調整する」など、適宜、必要に応じて工夫することが望ましい。

事故を防ぐにはメンテナンスも必要 ①

■点検・整備には自分が責任を持つ

〈ねらい〉

自転車のごく基本的な点検・整備の項目をイラストに示した。免許もなく手軽に乗れる自転車に対しては、「点検・整備が必要」という意識が薄いかもしれないが、車と同じで定期的に行う必要があることを理解させたい。特に、ブレーキ、ライト、ベルなどについては日常的にチェックするよう導きたい。「この前点検したのはいつか？」などについて話し合ってみるのも有効であろう。

事故を防ぐにはメンテナンスも必要 ②

■自転車の点検・整備に関するマーク・制度

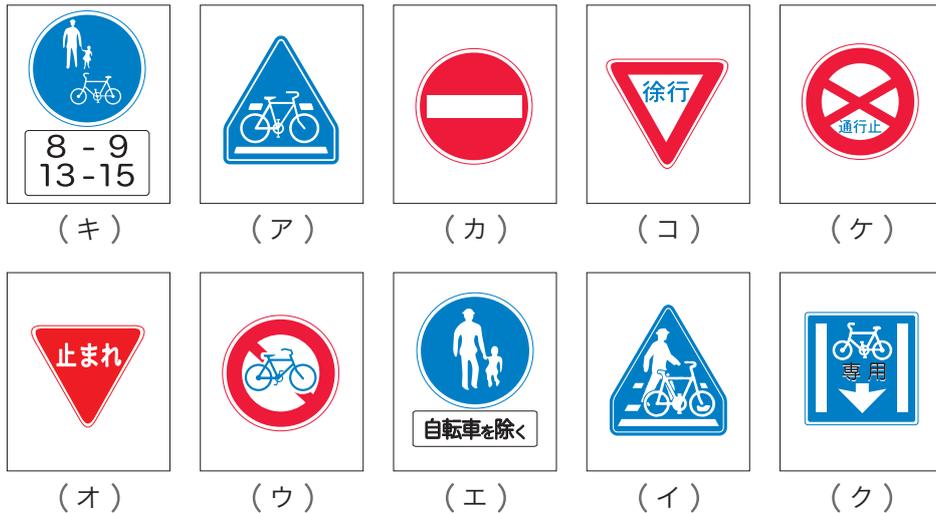
〈ねらい〉

1970年代以降、製品の安全性について関心が高まり、国や関係団体が品質や性能を保証したり、事故が起きた際にはメーカーや輸入業者が補償する動きが活発になった。また、交通量の増加とともに自転車の交通事故が急増し、対策が求められた。そうした中で自転車安全整備制度とTSマークが1979（昭和54）年、製品安全協会とSGマークが1973年にスタートした。これらについて知ること、品質の高い、安全で安心な製品を所有することの大切さを学ばせたい。

自動車損害賠償責任保険（自賠責）のように加入が義務づけられている保険は自転車にはないが、誤って事故を起こした時の備えとして、保険会社各社などでいわゆる「自転車保険」が用意されていることを知らせる。被害者のためだけでなく、自分のけがや自損事故を補償するものもある。全国高等学校PTA連合会には、自転車事故も含め、高校生が誤って事故を起こし加害者となった場合に補償する「全高P連賠償責任補償制度」がある。加入は学校単位で、所属の都道府県市高P連事務局に申し込む。

〈ねらい〉

自転車の通行に関しては、「一時停止」などの基本的な標識を理解してそれに従う必要があるが、自動車の運転に比べて、標識に対する意識はあまり高い傾向がある。標識はいわば道路上での細かいルールを表すサインであり、問題を解くことを通じて標識に対する意識を高めさせたい。「通学ルートではどんな標識を見たことがあるか？」などの問いも有効である。



〈ねらい〉

中高生が法律文を読むことはほとんどないと思われるが、道路交通法をはじめ交通関係の法律には、ふだんの通学に密接に関わる事柄がいろいろと定められていることを伝えたい。その一部をここに掲載したので、資料として活用してほしい。

〈ねらい〉

自分の行動における問題点を発見し、危険予測を学び、ストレスコントロールを理解しても、実際の生活で活かすためには、高めた意識を持続する必要がある。「交通安全ひとこと日記」は、シンプルな作業だが、「どう対処したかをあとで日記に書かなければならない」と意識することにより、「ヒヤリ」「ハッ」とした場面に遭遇した時に対処方法まで意識することを習慣化し、自然と行動をコントロールできるようにさせることを目的とする。1週間後、また1か月後に、自分の意識や運転の仕方がどう変わったかを話し合わせるのも有効であろう。